

高木復興大臣ぶら下がり記者会見録

(平成27年10月23日(金) 17:54～18:00 於) 福島県川内村役場)

1. 発言要旨

今日は浪江町、そして葛尾村、川内村を訪問させていただきまして、就任の御挨拶、そして各首長さんとの意見交換をさせていただきました。各首長さん、正に復興に向けて一生懸命取り組んでいただいているという印象を受けさせていただきました。ただ、それぞれにいろんな課題があるということも受け止めさせていただいたところでございます。

浪江町では帰還人口を見据えたコンパクトなまちづくり、小水力の再生エネルギーのスマートシティ、農業や農地の再生、イノベーションコーストの構想と連動した防災対策拠点の整備、医療・介護の人材確保に苦労なさっているという話をお聞かせいただきました。

また、葛尾村では来年春の帰村、営農再開に向けて線量の不安が根強いが、活気ある中心拠点の整備に邁進していくと。賠償、除染や今回の豪雨被災の要望も受けたところであります。

また、川内村では6割が帰村をしていると。今、準備宿泊に向けて間違いなく復興しているという感じを受けました。ただ、いわゆる20キロ圏内外の格差を埋める生活支援、あるいは除染の要望を受けたところでございます。

そうしたお話を受けて私からは将来像というものを具体的にお示しいたぐくと帰村が、あるいは帰還が早まるのではないかと、促せるのではないかと、そうしたことについて復興庁としてしっかりと頑張らさせていただくという話をさせていただきました。また、復興のとどまらず、正に新しい町、村をつくろうとしている姿が見えました。本当に大変な御努力をいただき、御苦勞をしているということを痛感いたしましたので、そうしたところに正に復興庁として寄り添っていく必要があるということも感じさせていただきました。

また、宮城、岩手、これは5年、いわゆる復興・創生期間、しっかり予算をつけていけば復興なるかなと、創生なるかなという感触を私は持っておりますけれども、残念ながら、今日改めて福島の被災地に入って、まだ少しそれでは足りない、まだ福島は本当に厳しい状況であるということを改めて認識をさせていただきましたので、その認識を持って帰りたいというふうに思います。また、要望書も賜りました。どの要望も非常に大切な重要な、そして切実な要望だというふうに感じました。できること、できないこと、あるという話もさせていただきましたけれども、お持ち帰らせていただいて、極力被災地の首長さんの意向に沿うような形で対処していきたいというような話もさせていただいたところでございます。

以上でございます。

2. 質疑応答

(問) 大臣、今日は最初に浪江町の首長とお話しなされて、この後、今、川内村と話されて、やはり町と村それぞれ状況が全く異なると思います。浪江町

はまだ全く帰還が進んでいなくて、一方で川内村は6割の方が一応戻っている状況。それぞれのステージによって支援メニューも違ってくると思いますが、けれども、今後帰還を進めていかれるというお話されていましたが、例えば川内村で参考になるお話を聞けたりですとか、浪江町でよりこういうところが進んでいない原因がわかってきたりとか、お話しされて何かわかったことは。

(答) 先ほど申し上げましたけれども、3つの自治体をお伺いさせていただきましたけれども、それぞれに、おっしゃったように、まだこれからというところ、それからやや進んでいる、かなり進んできたとあります。しかし、いずれにしてもそれぞれの状況の、その状況でやはり課題があるということ。ですから、たびたび申し上げておりますけれども、そうした場面場面、そういったところにどういったことを要望されているのか、どういうことが必要なのかということをしっかり把握して、そしてその状況に応じた支援なり協力なりをしていくということが大事だということを今日改めて感じさせていただいたということかというふうに思います。

(問) それで、この前、檜葉町が避難指示が解除されて、ある程度の方々が戻り始めている状況なんですけれども、川内村で今、進んでいるようなことが何か参考にできるようなことがあったりですとか、何かそういうヒントは今日は得られましたか。

(答) やっぱりどこも言えることは、とにかく早く、多くの方に帰ってきていただくという思いを強く持っています。さはさりとは現実というのは厳しい。ですから、コンパクトシティというような考えも持つということも必要なんだろうというふうに思いますけれども、どの町もとにかくしっかりと生活環境を整える、あるいはなりわいを整える、産業を整える、そうしたことによって私はいろいろな考え方があります、皆さん。帰るんだという人、あるいは新しい生活を始めるんだという方もいらっしゃると思いますが、私はやはりふるさとというものに一人でも多く帰ってきていただければ越したことがないんだろうというふうに思いますから、そうした思いで進めたいと思いますし、先んじている自治体もございますから、そういったところのいろんなノウハウ、知見というものは次に頑張っているところにも提供していつて、それぞれがよくなっていくという、そういう状況ができれば正にいいのではないかなと、そんなことを感じさせていただきました。

(以 上)